

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

東京都知事選に立候補を表明してから約一カ月後の二〇一一年三月十一日、東北地方の太平洋沖を震源とするA大震災が日本列島を襲いました。

その日、私は選挙事務所に行きました。石原慎太郎氏が都知事選に出馬するようになったのもちょうどその日で、私は選挙事務所内で石原氏出馬について記者会見を行う予定でした。

大きな揺れに襲われたのは記者会見の準備をしている最中でした。揺れは瞬く間に大きくなり、立っているのもやっとの状態。誰もが「これは只事ではない」と思ったはずです。当然、予定されていた記者会見は中止となり、事務所に訪れていたテレビクルーは、事務所周辺のビルから崩れ落ちてきた壁の残骸を撮影して引き上げていきました。

震災の翌々日、私自身が代表を務める公益財団法人School Aid Japan（スクール・エイド・ジャパン、以下SAJ）の仙台支部スタッフから「水がないんです。助けてください」とSOSが入りました。

しかし、みなさんご存じのように、震災直後は高速道路や国道も不通となり、福島以北の被災地に一般人が乗り込むのはとても難しい状況でした。そのことをSAJのスタッフに告げると、すぐさま宮城県知事に許可を取り、通行許可をもらってくれました。

(ア)震災から四日後、私たちは十三トントラックに積める限りの支援物資を積み込み、仙台へと出発しました。新潟方面から日本海側を北上し、山形県からぐるっと回り込んでの宮城県入り。それが、私が初めて被災地へ足を踏み入れた瞬間でした。

最初に訪れたのは仙台市にある宮城県庁でした。県庁周辺の街並みは廃墟状態、県庁内では自衛隊の方々が慌ただしく動き回り、まるで戦場のような様子でした。

海から離れた市街地でさえそんな状態なのですから、海沿いのエリアの被災状況はもっとひどいはず。海沿いの被災者たちにも支援物資を、と思いましたが、副知事から「海岸にはまだたくさん御遺体が浮かんでいる状況です。今、これ以上海側に行くのは止めてください」と言われ、止むなく断念しました。

しかし、実際に被災地に足を運んだことで、テレビなどの報道からでは決して感じるこのできない、①被災者の方々の切実な思いを受け止めることができました。私は県庁のスタッフに「これから毎週一便、十三トントラックが必要なものを、必要な場所にお届けします」と約束して仙台を後にしました。

(イ)それから毎週、私は現地と連絡を取り合い、被災者に支援物資をお届けしました。都知事選の終わった四月中旬、私は宮城県亘理郡の山元町を訪ねたのですが、そこで初めて津波被害にあった被災地の惨状を目の当たりにしました。

山元町は宮城県南部の海沿いにあります。家や建物はすべて流され、道路までもが無くなっていました。辺りを埋めつくす瓦礫が異様な匂いを発するその空気感、光景はテレビで見えていた被災地の状況とはまったく異なるものでした。『自然の脅威』などという言葉すら陳腐に感じてしまうほどの、圧倒的な力によって破壊された街が私の眼前に広がっていたのです。

山元町を訪ねた後も、街を根こそぎ津波に持って行かれた被災地をいくつも訪ねました。避難所にはすべてを失ったたくさんの人たちが身をよせ合っていました。

今思えば、②それまでの私の支援活動は心の底から「やってやるぞ」という気持ちはまだ湧き出ていなかったように思います。そんな私の気持ちを奮い立たせてくれたのは、他でもない、すべて津波に奪われた被災者の方々でした。

家も仕事も失った人は私にこう言いました。「渡邊さん、私は本当に幸運だったんだ。家も流された。果樹園も流された。財産も全部無くなった。でも家族六人がここにいます。私たちは本当に幸せなんです」。

避難所ですれ違ったご婦人は私に気付くと「渡邊さん、来てくれたんですね」と私の手を握ってきました。そして涙を流しながら、自分の息子が車の運転中に津波に襲われ、三日後に遺体となって車中から発見されたことを教えてくれました。(a)「私は息子と会えた。無事に葬式を済ませることができた。本当に幸せです」と言うのです。

(ウ)中には「都知事選、残念でしたね」と逆に私を励ましてくれる人さえいました。本来であれば、いずれも絶望の底にいる人たちです。でもその人たちが「私は幸せです」と前向きに、一生懸命生きている。そんな人々と接して、私の中のスイッチが入りました。

私は自分に問いかけました。「この過酷な状況の中を一生懸命生きている、この人たちを助けなくて③『生きている』と言えるのか?」と。『生きる』とは強い人が弱い人を、健康な人が病気の人を助けること、それが生きることではないでしょうか。少なくとも私はそう思うて生きてきました。

スイッチの入った私はそれまで以上に積極的に復興支援に携わるようになりました。そのような状況の中で陸前高田市の戸羽市長とお会いしたのです。

全国青年市長会から「陸前高田市の市長に会ってみてほしい」と頼まれ、私は戸羽市長とお会いしました。陸前高田市の被災状況も私の想像をはるかに超える酷いものでしたが、市長の話から国の被災地への対応が市民の苦痛をさらに深めていることを知りました。

その時です。戸羽市長から「今後も復興へのアドバイスをいただきたい。そのためには市の正式な参加になってもらえないか」と依頼されました。

「まだ何かできるのではないか?」そんな不満をずっと抱えていた私にとって、戸羽市長からの申し出はとてもありがたいものでした。

④断る理由などどこにもありません。「できる限りのことをさせていただきます」、私はそう答えていました。

それ以来、私は陸前高田市の参与としてほぼ毎週現地に伺い、復興のお手伝いをさせていただきました。

戸羽市長や役所の方々、さらに被災した市民のみなさんと復興作業を進めていく上で、いろいろな問題が見えてきました。

数ある問題の中でも、その最たるものは被災した各市町村に対する「国の対応」です。被災者の方々は日を重ねる毎に疲労の色を濃くして

います。復興作業に猶予はありません。スピーディかつフレキシブルな対応が求められているにも関わらず、“お役所仕事”というのでしょうか。国の対応は遅々として進まず、それによって被災した市町村も動くに動けない状況に陥っています。

(エ) そしてその希望を持つためには前提となる条件がいろいろと必要なのですが国は何も与えてくれない。被災した方々は希望も持てず、前に進むにも進めない状況がずっと続いています。

被災地が必要としている「条件となる前提」にはふたつあります。

まずひとつは「予算」です。被災地の復興に一体いくら資金が必要となるのか。その正確な額など誰にも分かるはずがありません。

(b)、復興は進めていかなければならない。であるとすれば、「大体このくらいの枠で進めていきましょう」というアバウトな予測の元で計画を進めていくしか方法はないのです。

企業の経営にしても、販売促進費にこれくらい、B人件費にこれくらい、といった具合に大枠の中で準備し、物事を進めていきます。「すべてきちんと決まってるからやる」というようなやり方では準備もできないし、すべてが後手後手にまわり、時代から取り残されるだけとなってしまう。

国に対して「大体このくらいの予算となります」と伝えても、市町村にその資金がなかなか降りてこない。東北の被災地は緊急事態を迎えているにも関わらず、国の「お役所体質」は一向に改まる気配がないのが実情です。

もうひとつの「条件となる前提」は「法律」です。(c)、現状の法律では農地を別の目的で使うにしても様々な制約が設けられています。

通常、農地転用の許可を得るには三カ月程度を要します。生産性の高い農地の場合は事前に農業振興地域整備法の指定から外さなければいけないため、さらに長くなってしまう(半年程度)。しかし、⑤そんなことをしては復興などままなりません。

このように、国に権限があるために市町村が動くに動けないという例がほかにもたくさんあります。国民を守るための法律が、被災地復興の足枷となってしまうのです。

ではどうしたらいいのか？私は被災地を「特区」とし、様々な権限だけでなく、法律の解釈なども各市町村に任せるべきだと考えます。

震災から九カ月も経った今も、国は何も決めてくれません。戸羽市長に「何か決まった？」と聞いても「いや相変わらずです。何も決まってないし、国が何をしようとしているのかもまったく分からない。これでは我々も手の打ちようがない」というお決まりの答えが返ってくるばかりです。陸前高田市の市長でさえ、極端な話、新聞情報に頼らざるを得ないような状況が続いています。

被災地がこれほどまでに困窮しているのになぜ国はC臨機応変に対応してくれないのか。その理由の根本はただひとつ。政治家も官僚も「」を取るのが嫌なのです。

何か言ってミスや失敗をしたら を取られる。自分のキャリアに傷をつけたくない。だったら何もしない方がいい。これがいまの日本社会の仕組みであり、ほとんどの政治家や官僚たちの姿勢でもあります。

公務員は何もしなければ仕事上の減点もなく、良い点数をもらえます。良い点数をもらえれば年功序列で給料が上がっていき、給料が上がることで安心して定年退職を迎えられます。そうやって守りに入り、余計なことは一切言わず、決まったことしかしない人を生み続けてきたのが戦後の行政の実態なのです。

政治家も国民のためではなく、自分たちの票がどうやったら確保できるか、そのことばかりに躍起になっています。

しかし、元を正せばそのような政治家を選び、今のような行政、社会システムをつくってしまったのも、我々国民の責任です。

戦後の高度経済成長期、右肩上がりの経済の中で安穩としてきたツケがいま回ってきたのです。多くの日本人が「政治なんて誰がやったって同じ。どうだっていい。政治家なんて都合のよいことを言っているばかりだし……」と言いながら、結局は投票も行かず、その都合のよいことばかりを言っている政治家たち”の思うがままに操られてきたのです。

なぜ日本の政治がここまで弱体化してしまったのか。日本人は「私たちは間違っていた」ということにいい加減気付くべきです。

国会議員を決める選挙の投票率が六十%を切ってしまうような国に未来はありません。投票率が七十%、いや八十、九十%を超えるような国をもう一度つくり上げていく。一人ひとりの一票が国を変える力になる。それを決して忘れてはいけないと思います。

(渡邊美樹 『希望 渡邊美樹の日本復興プラン』より)

※出題の都合上、省略・改編した箇所があります。

問一 線部A～Cの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 () 欄 a～c に入る語として、もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。
ア たとえば イ ですから ウ そして エ しかし

問三 線部①「被災者の方々の切実な思いを受け止めることができました」とありますが、筆者はなぜ「受け止めること」ができたのでしょうか。その理由として、もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 被災地に行く前に、東京都知事に立候補しており、日本の経済状況を深く理解していたから。
イ 被災地に行く前に、選挙事務所で大きな揺れを感じ、この揺れは只事ではないと思ったから。
ウ 実際に被災地に行くことで、テレビなどの報道では感じられないことを感じるようになったから。
エ 実際に被災地に行くことで、海沿いのエリアでの被害状況がもつともひどいことがわかったから。

問四 線部②「それまでの私の支援活動は心の底から「やってやるぞ」という気持ちはまだ湧き出ていなかったように思います」とありますが、筆者の「心の底から「やってやるぞ」という気持ち」が湧き出る表現のある場所を、本文から十四字で探し、書き抜いて答えなさい。

問五 線部③「『生きている』とありますが、筆者の考える「『生きている』と合っていないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい」。
ア 健康な人が病氣の人を助ける。
イ 自然に逆らわずに日々を送る。
ウ 強い人は相手が弱い時助ける。
エ 過酷な状況を皆で乗り越える。

問六 線部④「断る理由などどこにもありません」とありますが、それはなぜですか。文中の言葉を使って、四十字以内で答えなさい。

問七 線部⑤「そんなことをしては復興などままなりません」とありますが、復興に対する筆者の提案としてもつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 被災地を、権限だけではなく、法律の解釈も任せられる「特区」にする。
イ 被災地を「特区」として指定し、全ての権限を政府から引き受けさせる。
ウ 被災地の復興を、国民一人一人が考え行動し、その結果選挙の投票率を最低七十%まで上げる。
エ 被災地の復興を「大体このくらいの枠で進めていきましょう」というアバウトな予測で進める。

問八 本文には、次の一文が抜けています。本文にもどす時、もつともふさわしい場所を、文中の(ア)～(エ)の中から一つ選び、記号で答えなさい。

被災した方々に今、最も必要なのは『希望』です。

問九 文中に二つある には同じ言葉が入ります。もつともふさわしい言葉を漢字二字で書き抜いて答えなさい。

問十 本文中に述べられている内容と合っているものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。
ア 大震災後、筆者が支援物資をトラックに積んで被災地に初めて向かったのは、震災から五日後である。
イ 筆者が被災地に向かって実際に自分の目で見えた光景は、前からテレビで見ていた状況と一致していた。
ウ 筆者は、正式な参与として陸前高田市長からお願いをされてから、毎日現地で復興のお手伝いをした。
エ 筆者が考える、被災地を復興するために必要な条件の前提となるものは、「予算」と「法律」である。
オ 震災から九ヶ月経っても、国は何も決めてくれない状況に、筆者はその原因と対策を述べている。
カ 筆者は、被災した方々が明るい未来を思い描けるために最も必要なものは「夢」であると述べている。
キ 筆者は、投票率が上がると復興が進んで、その結果、公務員も一生懸命働くようになると考えている。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

春が過ぎて 夏が来ました。

葉っぱのフレディは この春 大きな木の梢に近い 太い枝に生まれました。そして夏にはもう 厚みのある りっぱな体に成長しました。五つに分かれた葉の先は 力強くどがっています。フレディは 数えきれないほどの葉っぱに とりまかれていました。はじめフレディは 葉っぱはどれも自分と同じ形をしていると思っていました。やがて ひとつとして 同じ葉っぱはないことに気がつきました。となりのアルフレッド 右側のベン すぐ上のクレアは女の子です。みんな春に生まれていっしょに大きくなりました。春風にさそわれて (a) 踊る練習をしました。日光浴のときは じっとしているのがよいということも覚えました。夕立ちがくるといっせいに雨に体を洗ってもらいました。

フレディの親友は ダニエルです。だれよりも大きくて 昔からいるような顔をしています。考えることが好きで 物知りでした。ダニエルはフレディに いろいろ教えてくれました。フレディが木の葉っぱだ ということ。木の根っこは 地面の下にあつて見えないけれど 四方に張っていて だから木は倒れないこと。目の下にあるのは公園で おはようとあいさつにくるのは小鳥たちであること。月や太陽や星が 秩序正しく 空をまわっていること。そしてめぐりめぐる季節のことなど みんな①ダニエルが教えてくれたことです。フレディは「葉っぱに生まれて よかったな」と思うようになりました。友だちはたくさんいるし 見はらしはよいし 枝はしなやかだし その上 風通しも日当たりも申しぶんなく お月さまは銀色の光で照らしてくれるからです。

夏になると フレディは ますますうれしくなりました。お日さまが早く昇つて おそく沈むので たくさん遊べます。(b) 照りの暑さは なんて気持ちがいいのでしょうか。夜になつても 昼間の暑さが残っているのですから フレディは気持ちがよくて 夢をみている気分です。

公園に 木かげを求めて 大ぜいの人が やつてきました。ダニエルは立ちあがり「さあ 体をAヨせて みんなでかげを作ろう。」と呼びかけました。フレディは ダニエルにたずねました。「どうして そんなことをするの？」するとダニエルは「暑さから逃げだしてきた人間に 涼しい木かげを作つてあげると みんな喜ぶんだよ。」と言いました。ダニエルの言つたとおりでした。木かげに おじいさんやおばあさんが集まつて来ました。子どもたちも来ました。お弁当を広げる人もいます。フレディたちは 葉っぱをそよがせて 涼しい風を送つてあげました。

※

ダニエルの話を聞いて フレディはますますうれしくなりました。老人たちは木かげから出ないで小声で 昔の思い出を話しているようです。子どもたちは 木に穴をあけたり 名前をほつたり いたずらもするけれど 笑つたり走つたり 生き生きしています。

けれど 楽しい夏はかけ足で通り過ぎていきました。たちまち秋になり 十月の終りのある晩 とつぜん Bサムさがおそつて来ました。フレディも 仲間のアルフレッドも ベンも クレアも (c) ふるえました。みんなの顔に 白く冷たい粉のようなものがつきました。朝になると 白い粉はとけて 雫が (d) 光りました。

「霜がきたのだ。」とダニエルが言いました。もうすぐ冬になる知らせだそうです。

緑色の葉っぱたちは一気に紅葉しました。公園はまるごとCニジになったような 美しさです。アルフレッドは濃い黄色に ベンは明るい黄色に クレアは燃えるような赤 ダニエルは深い紫色にそしてフレディは 赤と青と金色の三色に変わりました。なんてみごとな紅葉でしょう。②いっしょに生まれた 同じ木の 同じ枝の どれも同じ葉っぱなのに どうしてちがう色になるのか。フレディにはふしぎでした。「それはねー」とダニエルが言いました。「生まれたときは同じ色でも いる場所がちがえば 太陽に向く角度がちがう。風の通り具合もちがう。月光 星明かり 一日の気温 なにひとつ同じ経験はないんだ。だから紅葉するときは みんなちがう色に変わってしまうのさ。」

風が変わつたのは そのあとでした。夏の間 笑いながらいっしょに踊つてくれた風が 別人のように 顔をこわばらせて 葉っぱたちにおそいかかってきたのです。葉っぱはこらえきれずに吹きとばされ まき上げられ つぎつぎと落ちていきました。

「さむいよう」「こわいよう」 葉っぱたちはおびえました。そこへ 風のうなり声の中からダニエルの声が とぎれとぎれに聞こえてきました。

③みんな 引っこしをする時がきたんだよ。とうとう冬が来たんだ、ぼくたちは ひとり残らず ここからいなくなるんだ。」フレディは悲しくなりました。ここはフレディにとつて 居心地のよい夢のような場所だったからです。

「ぼくもここからいなくなるの?」
「そうだよ。ぼくたちは葉っぱに生まれて 葉っぱの仕事をぜんぶやった。太陽や月から光をもらい 雨や風にはげまされて 木のために他人のためにも りっぱに役割を果たしたのさ。だから 引っこすのだよ。」とダニエルは 答えました。

「ダニエル きみも引っこすの?」とフレディはたずねました。
「ぼくも 引っこすよ。」
「それはいつ?」

「ぼくのばんが来たからね。」

「ぼくはいやだ! ぼくはここにいるよ!」とフレディは おお声で叫びました。
アルフレッドもベンもクレアも そのとき が来て 引っこしていきました。見ていると風にさからつて 枝にしがみつく葉もあるし

あつさりはなれる葉っぱもあります。やがて木は葉を落として 裸どうぜんになりました。残っているのは フレディとダニエルだけです。「引っこしをするとか ここからいなくなるとか きみは言ってたけれどそれは――」とフレディは胸がいつぱいになりました。

「死ぬ ということですよ？」

ダニエルは口をかたくむすんでいます。

「ぼく、死ぬのがこわいよ。」とフレディが言いました。「そのとおりでね。」とダニエルが答えました。「まだ経験したことがないことはこわいと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化しつづけているんだ。変化しないものは ひとつもないんだよ。春が来て夏になり秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するって自然なことなんだ。きみは 春が夏になるとき こわかったかい？ 緑から紅葉するとき こわくなかったらう？ ぼくたちも変化しつづけているんだ。死ぬというのも 変わることのひとつなのだよ。」

変化するって自然なことだと聞いて フレディはすこし安心しました。枝にはもう ダニエルしか残っていません。

「この木も死ぬの？」

「いつかは死ぬさ。でも っいのちが 永遠に生きているのだよ。」とダニエルは答えました。

葉っぱも死ぬ 木も死ぬ。そうになると 春に生まれて冬に死んでしまうフレディの一生には どういう意味があるのでしょうか。

「ねえ ダニエル。ぼくは生まれてきてよかったのだろうか。」とフレディはたずねました。

ダニエルは深くうなずきました。

「ぼくらは 春から冬までの間 ほんとうによく働いたし よく遊んだね。まわりには月や太陽や星がいた。雨や風もいた。人間に木かげを作ったり 秋には鮮やかに紅葉してみんなの目を楽しませたりもしたよね。それはどんなに 楽しかったことだろう。それはどんなに 幸せだったことだろう。」

その日の夕暮れ 金色の光の中を ダニエルは枝をはなれていきました。

④さようなら フレディ。

ダニエルは満足そうなほほえみを浮かべ ゆっくり 静かに いなくなりました。

フレディは ひとりになりました。

次の朝は雪でした。初雪です。やわらかでまっ白でしずかな雪は じんと冷たく身にしみました。その日は一日中どんよりしたくもり空でした。日は早く暮れました。フレディは自分が色あせて枯れてきたように思いました。冷たい雪が重く感じられます。

明け方フレディは迎えに来た風につけて枝をはなれました。痛くもなく こわくもありませんでした。

フレディは 空中にしばらく舞って それからそつと地面におりていきました。

そのとき始めてフレディは 木の全体の姿を見ました。なんてがっしりした たくましい木なのでしょう。これならいつまでも生きつづけるにちがいありません。フレディはダニエルから聞いた っいのち^⑤ ということばを思い出しました。⑤ っいのち^⑤ というのは

永遠に生きているのだ ということでした。

フレディがおриたところは雪の上です。やわらかくて 意外とあたたかでした。引っこし先は (e) して居心地のよいところだったのです。フレディは目を閉じ ねむりに入りました。

フレディは知らなかったのですが――冬が終わると春が来て 雪はとけ水になり 枯れ葉のフレディは その水にまじり土に溶けこんで 木を育てる力になるのです。 っいのち^⑥ は土や根や木の中の 目には見えないところで 新しい葉っぱを生み出そうと準備をしています。大自然の設計図は 寸分の狂いもなく っいのち^⑥ を変化させつづけているのです。

また 春がめぐってきました。

(レオ・バスカーリカ 『葉っぱのフレディーいのちの旅』より)

※出題の都合上、省略・改編した箇所があります。

問一 線部A～Cのカタカナを漢字に直して答えなさい。(ただし、楷書でていねいに書くこと)

問二 () 欄a～eに入る語として、もつともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。
ア ぶるぶる イ キラキラ ウ かんかん エ ふわふわ オ くるくる

問三 線部①「ダニエルが」はこの文の主語です。この主語に対応する述語を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア みんな イ 教えて ウ くれた エ ことです

問四 ※ に当てはまる言葉としてもつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「フレディ ぼくたちもお弁当を広げよう。」
- イ 「フレディ 葉っぱだけで風は足りないよ。」
- ウ 「フレディ ぼくたちも昔の話をしようよ。」
- エ 「フレディ これも葉っぱの仕事なんだよ。」

問五 線部②「いっしょに生まれた 同じ木の 同じ枝の どれも同じ葉っぱなのに どうしてちがう色になるのか」とありますが、答えを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、十五字以内で書き抜いて答えなさい。

葉っぱたちの生き方には、生まれた時は同じでも、() 十五字以内 () から。

問六 線部③「みんな 引っこしをする時がきたんだよ」について、次の問題に答えなさい。

- (1) フレディの「引っこし」の解釈としてもつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。
- ア ここからいなくなり、自然に混ざること。
 - イ ここからいなくなり、生まれ変わることに。
 - ウ 今いる木を離れ、自分の命を落とすことに。
 - エ 今いる木を離れ、葉っぱを紅くすること。

(2) ダニエルは「引っこし」することをどのように思っていますか。その気持ちを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文中の言葉を使って、十字以内で答えなさい。

フレディは「引っこし」をこわがっているが、ダニエルは「引っこし」を() 十字以内 () と思っている。

問七 線部④「さようなら フレディ」とありますが、その時のダニエルの気持ちを表す内容としてふさわしくないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 満足 イ 納得 ウ 慈しみ エ 悲しみ オ 受容

問八 線部⑤「『いのち』というの永遠に生きているのだ」ということでした」とありますが、永遠に生き続けることができるのは、なにが『いのち』を変化させ続けているからですか。五字以上十字以内で書き抜いて答えなさい。

問九 本文中に述べられている内容と合っているものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア フレディと同じ木の葉はアルフレッドとベンだけであり、ダニエルは親友だが別の木の葉である。
- イ 夏になると大ぜいの人が木かげを求めて木の下へ来るので、フレディは夏があまり好きではない。
- ウ フレディたちと出会った夏の風と秋の風は、葉っぱたちとの接し方が違うので、別の風である。
- エ フレディは最初、木を離れることをこわがっていたが、ダニエルの言葉を聞いて少し安心した。
- オ この文章は、夏から春までの葉の命を通して、いのちが永遠に生き続けることを表現している。

一

問一 A だいしんさい B じんけんひ C りんきおうへん 問二 a ウ b エ c ア

問三 ウ 問四 私の中のスイッチが入りました

問五 イ 問六 (例)「まだ何かできるのではないか?」という不満をずっと抱えていたから。

問七 ア 問八 (エ)

問九 責任 問十 エオ

二

問一 A 寄 B 寒 C 虹 問二 a オ b ウ c ア d イ e エ

問三 イ 問四 エ

問五 なにひとつ同じ経験はない 問六 (1) ウ

(2) (例) 変わることの一つだ

問七 エ 問八 大自然の設計図

問九 エオ